

二〇一三年春、JKSK理事(現理事長)の大和田順子さんから「福島でのオーガニックコットンの栽培を支援するボラバス(ボランティアバス)を運行するので参加しませんか」と声をかけていただきました。最初は旅行者のように被災地に足を踏み入れることにためらいも感じましたが、その後、足かけ三年にわ

東北復興日記



148



農林水産省統計部勤務
中田哲也さん



自分の足と目と耳で

たつて十回ほど、個人として参加しています。

最初に福島県の浜通りを訪ねたのは五月のこと。常磐自動車道、JR常磐線ともに広野町から先は不通でした。町のコットン畑近くの平地には見渡す限り消波ブロックが並んでおり、ここが津波被災前は水田だったとは想像もつきませんでした。大破したJR富岡駅や被災漁船が積み上げられた四倉港(いわき市)の様子にも大きなショックを受けたものです。

それから二年後の今年、水田では稲作が再開され、富岡駅や四倉港のがれきはきれいになり、片づけられていました(富岡駅前の商店などは壊れたままです)。常磐自動車道は全通、常磐線も順次運転が再開され、広野町の防災緑地Ⅱ写真Ⅱも来年三月には完成するなどインフラ面での復興は進みつつあります。

一方、現在も多くの方々が避難を余儀なくされており、震災直後にはなかった問題(賠償、作業員宿舍の増加など)も顕在化しつつあります。このような困難な現実を前に、首都圏に住む私は無力感を覚えることもあります。しかし私たちに確実にできることがあります。それは、被災地を訪ね、自分の目で見て、現地の方々の話を直接伺うことです。この足かけ三年の間、被災地を訪ねるたび、現地の方々が異口同音に語られる言葉があります。それは「現地に足を運んでほしい。自分の目で見たことを周りの人に伝えてほしい」ということ。

被災地のこと、復興に取り組む方々のことを忘れずにいることは、首都圏(あるいは被災地以外の地)に住む私たちの最低限の務めではないでしょうか。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。